「ガマの油」口上で千客万来

筑波山江戸屋、地域の顔に

「さぁーさ、お立ち会い、御用とお急ぎのない方はゆっくりと聞いておいで」。茨城県つくば市の老舗旅館「筑波山江戸屋」宴会場に9代目女将（おかみ）、吉岡久子さんの「ガマの油売り口上」が響く。名調子で15分間を語り終えると客から万雷の拍手。

夫の9代目当主、吉岡茂夫氏が戦後の混乱期に筑波観光の目玉にと考えついたのがこの口上。「ガマの油」をおはこにしていた落語家、3代目・春風亭柳好師匠に頼み込んで文字に起こしたものが原形となり、広まった。久子さんも夫の「おまえもやれ」という一言で、旅館の仕事を終えてから夜中に落語のレコードを何回も聞いて覚えた。

旅館・ホテル業界には厳しい逆風が吹いている。経営が苦しくなった老舗旅館が内外資ファンドの出資を受け、その傘下で再建を進めている例も珍しくない。

一方、江戸屋は初代、吉岡久左衛門が1628年に筑波山の参詣客相手に宿屋を始めた。以来、一貫して地域に欠かせない存在となることで生き永らえてきた。

土産物としても販売

古くから筑波山に伝わる「ガマの油」は大坂冬の陣・夏の陣に従軍した光誉上人が治療に用いたこう薬が始まり。光誉上人の顔がガマに似ており「ガマ上人の油薬」と呼んだのが語源。江戸屋9代目、吉岡茂夫氏は薬剤師の専門知識を生かし、伝統的な成分を大きく変えず土産物として調合し直した。昔は貝殻に入っていたが、現在はプラスチック容器入り。

782年に徳一法師が開いた筑波山の大御堂は江戸時代に徳川幕府のひ護を受けてにぎわった。だが1868年の神仏分離令以降、「廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）」の流れのなか、弘法大師像をひそかに預かったのが7代目の吉岡由太郎氏。歴代の当主が命懸けで守った大師像は昨年6月、久子さんに抱かれ大御堂に里帰りした。

8代目の吉岡謙吉氏は東京・浅草の芝居小屋や劇場に行くと、「筑波山のだんなさんがお着き」と楽屋に知らせが行くほどの〝いい顔〟だった。いつも世話になっている役者は一斉に「いらっしゃいませ」と平伏。江戸屋に呼ばれると都会の洗練された芝居を演じて、客を楽しませた。後に茂夫氏が柳好師匠を引っ張り出せたのも8代目の人脈があったればこそ。

交際は幅広く、長期滞在した作家の山本有三は小説「女の一生」の中に江戸屋を登場させている。詩人の北原白秋は何本も書を江戸屋に贈ったが残っていない。戦争中に受け入れていた土浦海軍航空隊の飛行予科練習生（予科練）の多くが特攻隊になると知った米軍が猛烈な機銃掃射を加えたからだ。周囲の他の旅館は無事で、江戸屋の屋根だけが穴だらけ。掛け軸はぬれてぼろぼろになり、捨てるしかなかった。

薬剤師だった茂夫氏は兄が亡くなり家業を継いだ。そして筑波山の観光振興に情熱を注ぎ、観光協会を立ち上げる。

バス会社を経営する親せきに登山バスを運行するようかけ合い、「開始まで半年かかる」と言われると、バスの購入代金を立て替えて翌月から走らせた。バスは満員続きだったという。戦時中に廃止されたケーブルカーも復活させた。

旅館の仕事は妻に任せ、自らは情報収集のため役場勤めまでした。「復員してきた息子がダンスに凝り、コメをたたき売って費用にしている」という農家の噂きを聞くと、「江戸屋でダンス教えます」と書いた回覧板を回した。製薬会社勤務時代に接待で身に付けた特技が生きた。講習前には「ここは土地が肥え、コメも野菜も良い。いろんな作物を名物にしてがんばれ」と必ず一席ぶった。

茂夫氏が作ったつくば市観光協会の現会長は10代目当主、吉岡昭文氏が務める。春風亭柳好師匠の提案で1949年に始まった「ガマ祭り」は夏の大イベント。もちろん久子さんは今年も口上を述べる。

（編集委員　竹田忍）

許諾番号30006079　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

掲載日　2009年07月15日　日本経済新聞朝刊　017ページ

(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。